



**地元小学校で国際理解教育を実施する意義と課題：
国際理解教育プログラム「アジアシリーズ」のアン
ケート調査の比較検討を中心にして(研究プロジェ
クト 2008年度「地元小学校における国際理解教育
プログラムの実践と効果」の後継調査)**

著者	加藤 巖, バンバン ルディアント, 古岡 文貴, パン グレース・イン
雑誌名	東西南北
巻	2015
ページ	182-203
URL	http://id.nii.ac.jp/1073/00003836/

地元小学校で国際理解教育を 実施する意義と課題

国際理解教育プログラム「アジアシリーズ」の アンケート調査の比較検討を中心にして

加藤 巖 所員／経済経営学部教授

バンバン・ルディアント 所員／経済経営学部教授

古岡文貴 マラヤ大学アジアヨーロッパ研究所上級研究員

グレース・パン・イン マレーシア国立サバ大学講師

—— はじめに

現在、和光大学は様々な地域貢献事業を行っている。継続的なものとしては、社会人向けの公開講座（コンサートやシンポジウムなど含む）や研究成果の地元還元（地元企業との商品開発や幼児教育関連の催し物など）があげられる。また、学内施設（図書館や各種スポーツ施設など）を市民や近隣の小中学生らに貸し出すといったことも行っている。

本稿では、数ある地域貢献の取り組みの中でも地元小学校（川崎市立岡上小学校）で実施している児童向けの特別授業を取り上げる。実は、いま、和光大学は地元小学校へ大きく分けて3つの教育プログラムを提供している。3本の柱は「国際理解」「環境教育」「地元の歴史」を学ぶである¹⁾。

このうち児童向けの国際理解教育プログラムとして2008年に始まったのが「アジアシリーズ」である。この「アジアシリーズ」は、アジアの国を各回一つ

1) 「地元の歴史」を学ぶための教育プログラムとしては「縄文シリーズ」（2008年度以降岡上小学校の高学年対象）がある。「縄文シリーズ」は、参加児童が（指導を受けながら）縄文時代の住居を組み立てたり、火起こしの技術を学んだりすることを通じて、古代の人々の暮らしや文化に興味を持つことを目指している。こうした教育プログラムは実践的な歴史教育といえる。同小学校のある岡上地区からは多くの遺跡が発掘されており、以前から歴史教育に力を注いでいる。住居の組み立て指導は和光大学の関根秀樹（非常勤講師）が担当している。住居の材料は、岡上小学校の裏山から伐り出した木や竹を利用しており、児童に近隣の自然環境を考える機会を提供しているという見方もできる。

取り上げ、留学生や大学講師らが児童向けにその国の文化や人々の暮らしを紹介してきた²⁾。その目的は児童の海外への興味を喚起し、その後の国際理解に資することを目指している。

毎回の「アジアシリーズ」の授業はつぎのような形態で行われている。まず、写真やビデオなどの映像資料なども使いながら当該国の文化や暮らしを紹介している。その後、小学校の調理実習室を利用して、その国の代表的な料理を児童と共に作り試食している。講師陣には留学生を中心にしながら外部の方も含めて当該国の出身者が入っている³⁾。また、日本人学生や大学職員らも助手として参加している。とくに和光大学には留学生の学生生活を支援する「サポート学生制度」があり、彼ら（日本人の）サポート学生が参加してくれている。

暮らしや文化の紹介ではさまざまな工夫を凝らし、授業を聞いている児童が当該国をできるだけ身近に感じられるよう試みている。当該国の民族衣装を身に付けて伝統舞踊を披露し児童と共に踊ったり、その国の子どもの遊び（缶けりであったり鬼ごっこであったりする）を紹介し、実際に遊んでみたりしている⁴⁾。

上述のような「アジアシリーズ」と銘打った国際理解教育プログラムの実施状況とその効果について本稿では論考していく。とくに「アジアシリーズ」終了後に岡上小学校の先生方のご尽力で実施した児童向けアンケート調査の結果をまとめて紹介する。これらの調査結果が、地域貢献事業や国際理解教育プログラムに従事している方々への参考資料になればと願っている。

なお、前回の調査は2008年度に実施した。その調査結果はすでに和光大学総合文化研究所年報『東西南北2009』にて公表している。今回（2013年度）調査は最初の調査から5年経過後の2回目のものである。したがって、本稿では前回調査との比較検討も行っている。

ただし、対象学年は2008年度が6年生である一方、2013年度は5年生である。また、取り上げたアジアの国々も一部異なっている。さらに、同じ国を取り上げていても、講師が別人であったり、取り上げる内容が以前と違ったものであったりする。そこで、いくつかの点を除くと、純粋な意味での経年変化を見るところにはいかない。その分析は、おおよその傾向と変化を読み解くといったことが妥当な評価であろう。

2) 有志の教職員や学生が関わっている。学外の方にご協力いただくことも多い。また、川崎市教育委員会からの支援を受けている。一方、大学内の人材のやりくりなどに限界があり、必ずしもすべての要望に応えられているわけではない。

3) 毎回の授業には和光大学の日本人学生も助手として参加した。彼らのうちの多くは、その日に取り上げる国への短期留学やフィールドワークなどを経験していた。他大学の（国際理解教育に関心のある）学生が参加した回もあった。

4) ネパール出身の調理師に来てもらい郷土料理を紹介してもらったこともある。詳細については、以下の文献を参照してほしい。片岡義順「アジアシリーズの成果と課題」和光大学総合文化研究所年報『東西南北2009』pp.193-204。当時岡上小学校の教諭だった片岡氏が2008年度の「アジアシリーズ」の様子を紹介している。

「アジアシリーズ」の2008年度分と2013年度分の実施日程は以下のとおりである。

2008年04月24日	マレーシア編（マレーシア人研究生、和光大学教授）
2008年05月29日	スリランカ編（スリランカ人留学生、和光大学教授）
2008年06月27日	ベトナム編（ベトナム人留学生、ベトナム駐在元金融マン、和光大学教授）
2008年07月09日	インドネシア編（インドネシア人和光大学教授）
2008年09月10日	ネパール編（ネパール民族舞踊専門家、ネパール人調理師、和光大学教授）
2013年06月26日	インドネシア編（インドネシア人和光大学教授）
2013年07月10日	中国編（中国人留学生2人、和光大学教授）
2013年11月11日	フィリピン編（フィリピン人英語講師、米国人和光大学教授、和光大学教授）
2013年12月02日	韓国編（韓国人留学生、和光大学教授）
2014年02月24日	ネパール編（ネパール民族舞踊専門家、和光大学教授）

「アジアシリーズ」が始まった発端は、2007年春に岡上小学校から和光大学に対して英語授業への外国人講師の派遣依頼が来たことにある。依頼を受けた和光大学（大学開放センター）では検討の結果、学内の米国人講師を3度にわたり派遣した。その後、双方の代表が協議を重ねた結果、岡上小学校の進める国際理解教育のためにお互いが広く協力するといった合意が生まれ、2008年春からは上記のような教育プログラムが始まったのである。

小さなきっかけから始まった国際理解教育プログラムの取り組みを多くの方に知っていただくと同時に、本稿を通じて、小学校と大学という、教育課程の異なる段階にある2つの学校が連携して授業を行うことの意義や可能性についても考えていただく契機になればと願っている⁵⁾。

1 ―― 調査概要

2008年度および2013年度の「アジアシリーズ」終了後に、授業評価アンケート調査を行った。調査の実施は、和光大学総合文化研究所の研究プロジェクト『人的資源の活用に基づく地域開発モデルをアジア各国で探る』（2006年度開始の

5) 出前授業を担当した和光大学の教員と本稿を執筆する地域開発モデル研究会のメンバーは一部が重複している（バンバン・ルディアントと加藤巖）。とくにバンバン・ルディアントと加藤巖は岡上小学校との連携授業には2007年から関わっている。

研究プロジェクト、代表は加藤巖／以下、地域開発モデル研究会と略称）が岡上小学校の協力を得て行った。調査実施期間は、2008 年度分が同年 9 月中旬、2013 年度分は 2014 年 3 月初旬であった。

調査対象者は、「アジアシリーズ」を受講した岡上小学校の児童である。2008 年度分が 6 年生 2 クラスの 48 名、2013 年度分は 5 年生 2 クラスの 45 名であった。地域開発モデル研究会が作成したアンケート調査票は事前に岡上小学校においてチェックしてもらい、その上で学級担任によって児童へ配布された。

児童に対しては、個人情報保護の観点から氏名などを回答しないように、また、答えたくないものには回答する必要がない旨を伝えた。結果として 2008 年度分は 46 通の回答（有効回答 46 通）を、2013 年度分は 45 通の回答（有効回答 45 通）を受け取ることができた。

配布したアンケート調査票の表題は『岡上小学校と和光大学の連携授業を充実させるためのアンケート』であり、属性 3 項目、質問 26 項目についての無記名アンケート方式である（2008 年度と 2013 年度の調査票はほぼ同様の形式と内容）。回答の選択肢数が全部で 100 超とやや小学生児童にとっては多かったものと思われる。調査票は A3 版見開き 1 ページ全体にわたっている。

本稿では、データに統計的処理を加え、独自に幾つかの傾向を汲み上げ解説している。したがって、本報告の内容に関する責任は調査実施主体である地域開発モデル研究会が負うものである。

なお、2008 年度のアンケート調査に関わる地域開発モデル研究会メンバーは、和光大学総合文化研究所所員である加藤巖、バンバン・ルディアントおよびマレーシア国立サバ大学准教授の古岡文貴（現在はマラヤ大学アジアヨーロッパ研究所上級研究員）であった。2013 年度分のアンケート調査に関しても同様であるが、2014 年度の「アジアシリーズ」マレーシア編（同年 6 月 4 日）を担当したグレース・パン・イン（マレーシア国立サバ大学講師）にも加わってもらい、実施担当者としての率直な意見を述べてもらった⁶⁾。

2——回答者の基本属性について

(1) 学年・性別・出席率

2008 年度アンケート調査の回答者は 46 人で全員が岡上小学校 6 年生であった。その内訳は「男子」23 人、「女子」23 人と男女が同数であった。また、全 5 回の「アジアシリーズ」への出席に関しては、回答者のうち 44 人がすべての回へ出席している。回答者の「アジアシリーズ」への出席率は 99.1%となっている。

6) グレース・パン・イン講師の所属するマレーシア国立サバ大学と和光大学は学術交流協定を結んでいる。2014 年度にグレース講師は日本で研究活動を行っていた。

同様に、2013 年度アンケート調査の回答者は 45 人で全員が岡上小学校 5 年生であった。その内訳は「男子」23 人、「女子」22 人であった。また、全 5 回の「アジアシリーズ」への出席に関しては、回答者のうち 41 人がすべての回へ出席している。回答者の「アジアシリーズ」への出席率は 97.3%となっている（無回答者 1 名を除く）。

(2) 外国の文化や外国語への興味

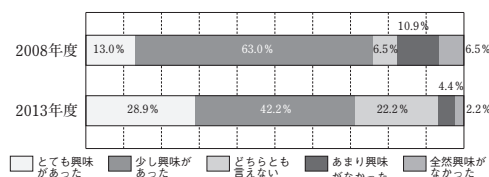
「アジアシリーズ」を受講する前に「外国の文化や外国語への興味」をどの程度持っていたのかを尋ねたところ、図表 1 のような結果となった。

まず、2008 年度には児童のうち 76.0%が「外国の文化や外国語への興味」を（アジアシリーズの受講前から）持っていたと回答していた（「とても興味があった」13.0%と「少し興味があった」63.0%の合計）。これが 2013 年度には 71.1%へと若干低下している。ただし、2013 年度は「とても興味があった」児童は全体の 28.9%へと大きく伸びている。

一方、関心の度合い順にそれ以降の回答を並べ 2008 年度と 2013 年度を比べてみると、「どちらともいえない」が 6.5%から 22.2%へ、「あまり興味がなかった」が 10.9%から 4.4%へ、「全然興味がなかった」は 6.5%から 2.2%へと推移している。

ここから 5 年間の経年変化の傾向を大きくつかむと、2008 年度から 2013 年度にかけて、外国文化や外国語に対して強い関心を持つ層が増える一方、「どちらともいえない」を含む関心の薄い層も広がっていることがわかる⁷⁾。また、この設問に対する回答では 2008 年度調査では男女差が見られ、おおむね女子の方が「外国の文化や外国語への興味」の度合いが高かった⁸⁾。ところが、2013 年度になると女子「優位」とは必ずしもいえなくなっている（この点は後述する）。

図表 1 外国の文化や外国語への興味（受講前）



(3) 海外旅行の経験

海外旅行の経験を尋ねたところ（図表 2）、2008 年度には 28.3%の児童が「経験あり」と回答している。これが 2013 年度には「経験あり」の児童が 31.1%へ

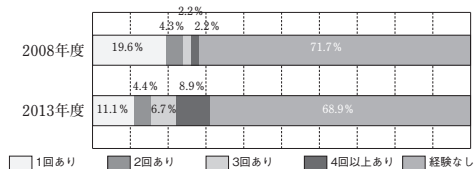
7) 外国文化へ関心を持つ層と無関心層の開きがどのように推移するのかを今後の調査で探っていく。

8) さらに、「アジアシリーズ」受講後に「外国の文化や外国語への興味」が増したかどうかを問うたところ、2008 年には受講後の興味の度合いの伸び具合も女子の方が高くなっていた。

と増加し、かつ渡航回数も「複数回」の児童の割合が増えている。とくに「4回以上」が8.9%へ大きく伸びている。

一方で、「経験なし」の児童の比率は2008年度から2013年度にかけておおそ回答者の7割を占め続けており、それだけ海外旅行についても「経験」の差が広がっているとわかる。

図表2 海外旅行の経験



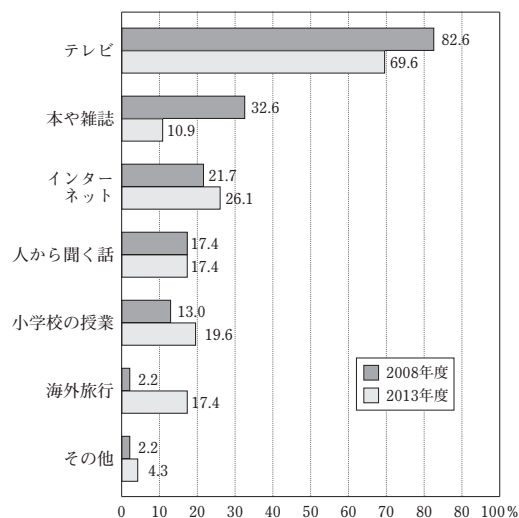
(4) 外国のことを知る方法

「外国のことを知る方法」を1人2つまで選択できる複数回答として尋ねたところ（図表3）、2008年度は回答総数が79個、2013年度は76個であった。

その最多回答は両年度とも「テレビ」となっている（82.6%と69.6%）。つまり、児童にとって情報源としてのテレビはまだまだ圧倒的な存在感を持っていることがうかがえる⁹⁾。

ただし、図表3で示されるとおり、「テレビ」も含めて回答率に変化が見られる。とくに2013年度には「テレビ」と「本や雑誌」の回答率が下がる一方、「インターネット」や「小学校の授業」「海外旅行」が伸びている。すなわち、2008年度から2013年度にかけて「本や雑誌」が32.6%から10.9%へ、「インターネット」が21.7%から26.1%へ、「人から聞く話」が17.4%から17.4%へ、「小学校の授業」が13.0%から19.6%へ、そして「海外旅行」が2.2%から

図表3 外国のことを知る方法（複数回答・回答率）



9) 2008年度も2013年度もアンケート調査を行う前の（研究会メンバーの）予測では「インターネット」がもう少し大きな位置を占めるだろうとしていた。ところが、その予測は当たらなかった。今後、「家族それぞれがネット端末を個人所有」をするようになり、同時にインターネットとテレビの融合が進めば、「外国のことを知る」情報源としてのインターネットの相対的地位は高まっていくと推測される。

17.4%へと推移している。

地域開発モデル研究会では、昨今の WEB 上の情報の充実と検索機能の向上、スマートフォンの（低年齢層への）普及などを鑑みて、インターネットの情報源としての優位性が高まる一方、テレビと本や雑誌といった印刷物の相対的な地位は落ちていくだろうと予測している。こうした予測が正しいならば、今後は国際理解教育プログラムの実践は情報技術を活用した展開、とくに児童との WEB 上での双方向のやり取りなども工夫する必要があるだろう。

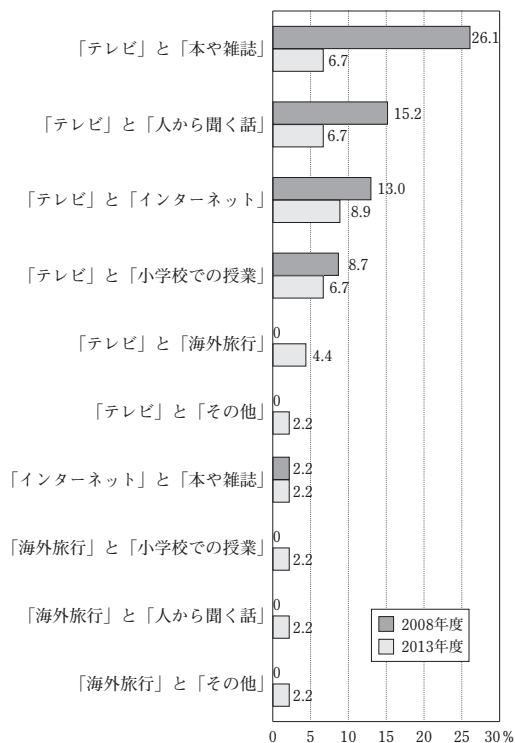
また、図表 4 にあるように「外国のことを知る方法」（情報源）の組み合わせに関しても変化が見られる。例えば、2008 年度に情報源の最も多い組み合わせは「テレビ」と「本や雑誌」であり、回答者数中の 26.1%がこの組み合わせを選んでいる。つまり児童の 4 人に 1 人が選んでいる¹⁰⁾。同じく、「テレビ」と「人から聞く話」の組み合わせを選

んだのは回答者中の 15.2%、「テレビ」と「インターネット」の組み合わせを選んだのは回答者中の 13.0%であった。2008 年度には、単独では回答率の低い「人から聞く話」が「テレビ」と組み合わせることで、（単独での回答率がより高い）「インターネット」を上回っていた。

一方、2013 年度になると情報源の組み合わせが多様化している。最大の組み合わせは「テレビ」と「インターネット」になっている。ただし、他の組み合わせとの格差はさほど大きくない。2008 年度には無かった「海外旅行」と「テレビ」の組み合わせのような新規なものも生まれている。

さらに 2013 年度の調査結果を子細に見ると、「外国への

図表 4 外国のことを知る方法（情報源）の組み合わせ（一部抜粋）



10) 2008 年度には「本や雑誌」を選んだ児童の 8 割が「テレビ」も同時に選んでいる。「本や雑誌から」と答えた児童が 3 割超だったことから、児童の情報収集の手段はテレビが主役で、それを除くと「インターネット」よりも「印刷された文字情報」の方が多いことがわかる。

関心」度合いによって情報源としての「テレビ」の重要度が異なっていることがわかる。すなわち、外国文化へ関心の薄い児童たち（外国文化の関心は「どちらともいえない」「あまり興味がなかった」「全然興味がなかった」の合計）では、テレビを情報源とする回答率は76.9%だったが、「外国文化にとっても興味がある」と回答した児童の中で「テレビ」が情報源と回答したのは61.5%と、「テレビ」の位置づけが15%ほど低くなっている。

3——「アジアシリーズ」受講後の児童の意識変化

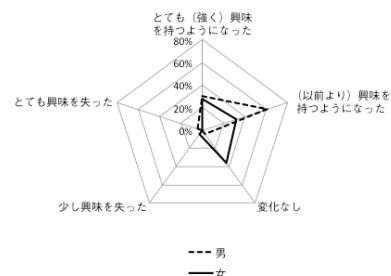
(1) 以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになりましたか

2013年度の「アジアシリーズ」の受講後に「以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになったか」を尋ねたところ（図表5）、「とても興味を持つようになった」が28.9%（男子30.4%、女子27.3%）、「（以前より）興味を持つようになった」が46.7%（男子60.9%、女子31.8%）、「変化なし」が20.0%（男子4.3%、女子36.4%）、「（かえて）少し興味を失った」と「とても興味を失った」はともに2.2%となっている。

上記のように、回答者の75.6%が「アジアシリーズ」を受講することで、外国の暮らしや文化への興味が増したと答えている。そして、2008年度と異なり、比較的に男子児童たちの関心の高まりが目立つ結果となっている。

図表6は「アジアシリーズ」受講前

図表5 「アジアシリーズ」を受講して、以前よりも外国の暮らしや文化に興味を持つようになりましたか



図表6 「アジアシリーズ」を受講する前後の外国の暮らしや文化への関心度の変化

		受講後の変化			
		とても（強く）興味を持つようになった	（以前より）興味を持つようになった	変化なし	興味を失った
受講前の関心	外国の文化や暮らしにとっても興味があった	46.2%	23.1%	15.4%	15.4%
	少し興味があった	26.3%	57.9%	15.8%	
	どちらとも言えない	20.0%	60.0%	20.0%	
	あまり興味が無かった		50.0%	50.0%	
	全然興味が無かった			100.0%	

の外国への関心度と受講後の意識変化を示している。ここから読み取れるのは、もともと「外国の文化や暮らしに興味があった」児童は、「アジアシリーズ」を受講することで、さらに外国の文化や暮らしに関心を示すようになっていることだ。例えば、受講前に「外国の文化や外国語にとっても興味があった」児童の46.2%は、受講後に「とても強く興味を持つようになった」と回答している。以下、同様に「少し興味があった」児童の26.3%、「どちらとも言えない」児童の20.0%が受講後に「とても強い興味を持つ」ようになったと回答している。

すなわち、特徴的な点は、受講前に外国文化への関心が高かったグループの方が、そうでないグループよりも受講後の興味の度合いの伸びが大きいことである。こうした傾向は2008年度調査でも同様であった。以下、2013年度調査の傾向を見ていこう。

上述のように「アジアシリーズ」の受講前から「外国の文化や外国語にとっても興味があった」グループでは、その5割弱が受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答している。一方、受講前に「少し興味があった」グループ、興味があるともないとも「どちらともいえない」グループ、「全然興味がなかった」グループでは受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答しているのはそれぞれ3割弱から2割ほどである。また、受講前に「外国の文化や外国語にあまり興味がなかった」グループでは、受講後に「とても強く興味をもつようになった」と回答しているものはゼロである。さらに、「全然興味がなかった」グループでは受講後に「変化なし」と回答している。

そこで、「アジアシリーズ」は児童の外国の文化や暮らしへの興味・関心を全体的に底上げすると同時に、もともと外国の文化などへ関心の高かった受講者の好奇心へさらなる刺激を与えているといえるだろう。

一方で、「アジアシリーズ」の受講前には「外国の文化や外国語」にとっても興味を持っていたにも関わらず、アジアシリーズの受講後に「興味を失った」と回答した児童が15.4%いた。これらの児童はアジアシリーズで行った特定の事項に不満足であったため、「興味を失った」との回答を寄せているようである。研究会内部の今後の検討課題としたい。なお、今回はこの設問に対する回答に個人情報が含まれており、明示すると回答者を特定される恐れがある。このため、本稿では詳述を割愛する。

(2) 外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなりましたか

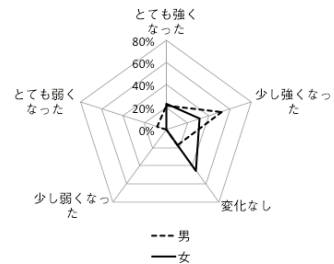
2013年度の「アジアシリーズ」受講後に「外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなったか」との問いに対しては(図表7)、「とても強くなった」との回答が22.2%(男子21.7%、女子22.7%)、「少し強くなった」が42.2%(男子52.2%、女子31.8%)、「変化なし」が31.1%(男子17.4%、女子45.5%)、「少し弱くなった」が0%、「とても弱くなった」が4.4%(男子のみ)であった。

図表7で示されるとおり、この設問に対する回答は男子の方がややポジティブな回答をしている。実はこの点は2008年度調査と異なっている。2008年度調査では明確に女子の方が外国語の勉強についてより積極的な姿勢を見せていた。

また、2008年度調査に比べて、外国語の勉強をしようという気持ちが「とても強くなった」児童の割合が今回調査の方が高くなっている（2008年度の13.0%から2013年度には22.2%へと向上）。このように外国語の勉強をしようという気持ちが「とても強くなった」割合が9ポイント上昇したのは、男子の肯定的な回答率の上昇が寄与している。

上記のような変化は、2008年度と2013年度の2つの調査の間に起こったことから生み出されたのではないだろうか。その第一は、小学校における英語教育の進展である。英語の授業が小学校で始まったことは、児童の回答に影響を与えていると推測できる。すなわち、前回調査で示された外国語に対して積極的だった女子児童は、今回はすでに英語学習の開始によって、外国語の勉強へ強い関心を抱いており、アジアシリーズを受講したところで、いまさら「変化はない」との回答が多くなったのだろうと考えられる。一方、語学の勉強に奥手とされる男子児童は、すでに始めている英語学習をアジアシリーズの受講が後押しした形になっていると（研究会では）解釈している。

図表7 「アジアシリーズ」を受講後に、外国語を勉強しようと思う気持ちが強くなりましたか

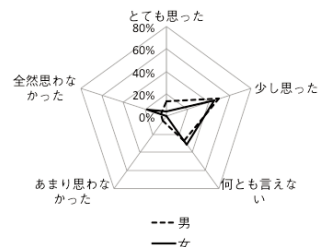


(3) 自分で調べ学習をしようと思いましたが

2013年度の「アジアシリーズ」を受講してみて「自分で調べ学習をしようと思ったか」との問に対しては（図表8）、「とても強く思った」との回答が9.1%（男子13.6%、女子4.5%）、「少し思った」が47.7%（男子50.0%、女子45.5%）、「何ともいえない」が29.5%（男子27.3%、女子31.8%）、「あまり思わなかった」が2.3%（男子4.5%、女子0.0%）、「全然思わなかった」が11.4%（男子4.5%、女子18.2%）であった。

この設問に対する回答でも今回調査の

図表8 「アジアシリーズ」を受講して、自分で調べ学習をしようと思いましたが



方が 2008 年度調査よりもポジティブな回答を増やしている。確かに 2013 年度調査では前回調査よりも「とても強く思った」児童の割合が向上している（2008 年度は 8.7%）。一方、「あまり思わなかった」と「全然思わなかった」児童の割合も（2008 年度に比べて）増加している。そこで、調べ学習（自らが学ぼうという姿勢）に関しても中間層が減少して、上位層と下位層が双方増え、その開きが広がったといえる。

さらには、他の項目と比較すると、この設問に対する回答は低調（消極的）といわざるを得ない。図表 8 でもレーダーチャート上では消極性を示す下向きの大きな膨らみが描かれている。こうしたことは、2008 年度調査とも相通ずるものである。そこで、前回調査の結果をまとめた際にも指摘したことを再掲しておきたい。

上記は「外国のことを知る方法」の最大回答が「テレビ」であることと若干の関係があるかもしれない。多くの情報提供型のテレビ番組は、それ自体が自己完結型となっている。つまり、事の顛末をすべて見せて視聴者が疑問を差し挟む余地のないままに終わってしまうので、番組終了後からの発展性に欠ける構成となっている。

また、情報過多の昨今ではメディア情報の使い捨てやその場限りの娯楽性といった側面が強く押し出されている。こうしたことに慣らされている場合には、情報の受け手が自らの裁量で自己の関心や興味を膨らませていくことに疎くなる可能性が指摘できるだろう。

一方では、一部の識者が指摘するように日本の学校では知識を詰め込むことが主要な「勉強」で、そこでは自ら考える訓練に欠ける¹¹⁾といったことや、放課後の塾や習い事で時間が取られて他のことをする余裕が子どもたちに与えられていない¹²⁾といったことの影響があるかもしれない。

上記の回答傾向がでてきたことを鑑みて、今後は大学からの出前講義では、子どもたちが自らの学習で知識を広げ、対象に対する学びの発展を手助けするような工夫をしていくことが望ましいといえるだろう。

(4)「アジアシリーズ」のことを家族や友人と話しますか

2013 年度のこの設問に対する回答は（図表 9）2008 年度に比べて低下しているが、それでもおおむね前向きなものとなっている。すなわち、「よく話す」が 31.8%、「時々話す」が 36.4%であり、全体の約 7 割が多かれ少なかれ「アジアシリーズ」のことを「家族や友人と話す」と回答している。

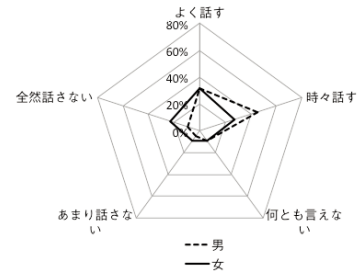
ちなみに、男女ともに 3 割強の児童が「よく話す」と答えている。一方で、

11) Alex Kerr, *Dogs and Demons - The fall of modern Japan-*, Penguin Books 2001 pp.295-296

12) *Ibid.*, pp. 296-299

2013 年度は（前回調査とは異なり）女子の 2 割が「全然話さない」と回答している（前回調査では 4.3%であった）。ここでもどちらかというとながティブな回答の女子の増加が目立つ結果となっている。

図表9 「アジアシリーズ」のことを家族や友人と話しますか



4——「アジアシリーズ」への児童の評価

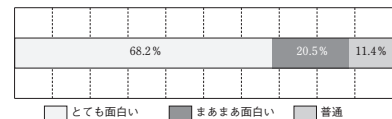
(1) 「アジアシリーズ」全般の感想

2013 年度の「アジアシリーズ」がすべて終了した後に受講者へ受講後の感想を尋ねたところ（図表 10）、全体として「とても面白い」が 68.2%、「まあまあ面白い」が 20.5%、「普通」が 11.4%といった回答率であった（無回答者 1 名分を除く）。「まったく面白くない」と「あまり面白くない」の回答はゼロであった。

おおむね好意的な回答となっている。とくに、男子の 73.9%と女子の 61.9%が「とても面白い」と回答を寄せている。この設問に対する回答の傾向は 2008 年度の調査と似通っている。ただし、肯定的な評価に関しては 2008 年度調査では女子の回答率が高かったが、2013 年度調査では逆に男子が逆転している。

ちなみに、全般的な感想が好意的であるのは、児童が大学のアンケート調査に対して大人びた気遣いを見せた結果かもしれない。少なくとも講師たちへの遠慮もあるだろう。そこで、この回答に関しては若干の偏向があることを意識する必要があると考える。

図表10 「アジアシリーズ」の感想



(2) 「アジアシリーズ」で面白いと感じたもの

2013 年度の「アジアシリーズ」で面白いと感じたものを児童に回答してもらった。その結果の抜粋が図表 11 である。同図表では縦軸に児童が最も面白いと感じたもの（1 番面白い）と横軸に 2 番目に面白いと感じたものを置き、その組み合わせを示している。

児童のうち 27 人が「調理実習」を 1 番面白いと選択しており、この中から 2 番目に面白いと「先生の話」を選んだ児童が 6 人、「写真」を選んだのが 7 人、「踊りと遊び」を選んだのが 4 人、「ビデオ」を選んだのが 10 人であった。

ついで児童のうち6人が「先生の話」を1番面白いと選択しており、この中から2番目に面白いと「調理実習」を選んだのが2人、「写真」を選んだのが3人、「ビデオ」を選んだのが1人、「踊りと遊び」および「無回答」は0人であった。

そこで、1番と2番の連続する選択で最も多かった(10人)のは「調理実習」(1番)と「ビデオ」(2番)の組み合わせであった。つぎに多かったのは、「調理実習」と「写真」の組み合わせ(7人)である。実は上記のような(児童が面白いと感じるものの)組み合わせは、2008年度調査と2013年度調査で組合せの順位はほぼ同じになっている¹³⁾。

ここまでの集計からは、児童の人气が「調理実習」と「先生の話」に比較的集まっている様子がうかがえる。一方、「児童の外国文化への関心度合い」と「児童が面白いと感じたもの」の相関につきクロス集計したところ、以下のような結果がでた。

すなわち(図表12)、「(元々)外国に興味があった児童(とても興味があった児童と少し興味があった児童の合計)」のうち、「調理実習」が1番面白いと回答した児童は18人、以下、「先生の話」4人、「写真」4人、「踊りと遊び」3人、「ビデオ」2人となっている。

同じく「以前よりも外国に興味を持つようになった児童(とてもと少しの回答者合計)」のうち、「調理実習」が1番面白いと回答した児童は19人、以下、「先生の話」5人、「写真」5人、「踊りと遊び」2人、「ビデオ」2人、「無回答者」も1

図表11 「アジアシリーズ」で面白かったものの中で、1番目と2番目に面白いものの組み合わせ (人数)

		2番目に面白い					総計
		調理実習	先生の話	写真	踊りと遊び	ビデオ	
1 番 面 白 い	調理実習		6	7	4	10	27
	先生の話	2		3		1	6
	写真	3	1			1	5
	踊りと遊び	2	1				3
	ビデオ	1		1			2
	無回答					2	2
							45

図表12 外国(文化)への関心度合と児童が面白いと感じものの相関 (人数)

	調理実習	先生の話	写真	1番面白い 踊りと遊び	ビデオ	無回答	総計
(元々)外国に興味があった児童が 1番面白いと選んだもの	18	4	4	3	2	1	32
(以前よりも)外国に興味を持つよう になった児童が1番面白いと選んだもの	19	5	5	2	2	1	34
調べ学習をしようと思った児童が 1番面白いと選んだもの	13	4	4	2	1	1	25

13) 2008年度と2013年度では特定の問題に対する回答者数に違いが生じている。

人となっている。このクロス集計では、これら2グループに関してほぼ似通った回答率になっている。ただし、「以前よりも外国に興味を持つようになった児童」の方がより「先生の話」を選好する傾向が見られる。これは「アジアシリーズ」によって外国への興味がわいてきて、先生の話を中心に聞くようになったのか、逆に先生の話面白と感じることで、外国への興味を強めていったのか、両方の側面から解釈を加えることができる。当然ながら、研究会メンバーとしては「先生話を面白と感じる」ことで、「外国への興味を強めた」といった児童の内面的変化を望んでいる。

また、「調べ学習をしようと思った児童（とてもと少しの回答者合計）」のうち、「調理実習」が1番面白と回答した児童は13人、以下、「先生の話」4人、「写真」4人、「踊りと遊び」2人、「ビデオ」1人となっている。先の2グループと同様に「調理実習」への選好が強くなっている。これは、実際にアジア各国の料理を作って味見をするという体験を通じて、関連する事柄を自習してみようと考えた児童がいたことの証左であろう。実際、児童が家に帰り家族と共に（習ったばかりの）アジア料理を試作してみたり、親子でレシピを探してみたりといったことが報告されている。実践的な国際教育プログラムに刺激を受けて、（一部の児童の中に）調べ学習の機運が高まったということであろう。

5 ― 個別の事柄への児童の評価

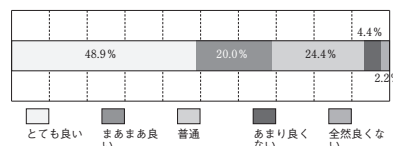
(1) 先生の話(し方)およびその時間

2013年度調査では「先生の話(し方)」に関して(図表13)、おおむね好評であった。児童のうち48.9%が「とても良い」、20.0%が「まあまあ良い」と回答している。つまり全体の7割程度が「先生の話(し方)」については肯定的な評価をしている。残りの24.4%の児童も「普通」の評価を与えており、否定的な評価である「あまり良くない」と「全然良くない」は両者合計で6.6%に留まっている。

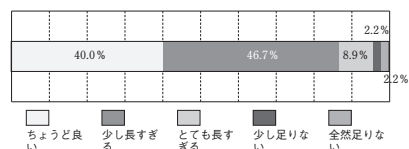
ただし、この設問に関しては、2008年度の方がより高い(肯定的な)評価を児童から得ている。恐らく、学年の違い(2008年度は6年生対象、2013年度は5年生対象だった)をもう少し勘案して、より平易に分かりやすい話し方に工夫を凝らす必要があったものと思われる。

ついで「先生が話す時間」に関しては(図表14)、「ちょうど良い(=時間は適切)」

図表13 先生の話(し方)への評価



図表14 先生が話す時間への評価



との回答が全体の 40.0%を占めている。この一方で、「少し長すぎる」と感じる児童が 46.7%いた。「とても長すぎる」の 8.9%を加えると半数以上の児童が「先生の話は長い」と感じていたことになる。

毎回の模擬授業では、前半の約 30 分～40 分を講義（先生の話）として各国の文化や歴史、地理、そして庶民の暮らしなどの紹介にあてている。こうした小学校の 1 コマ分を座学に費やした後に調理実習を行っていた。そこで、調理実習で生き生きと動きまわるまでの（前半の）座学の時間は多くの児童にとっては長すぎると感じられたものと推測できる。また、先に触れたように 2013 年度は 2008 年度よりも一学年若い 5 年生を対象としていたので、その分だけ座学に対する耐性が醸成されていなかったのかもしれない。

(2) 写真や映像（ビデオ）の中身およびその分量

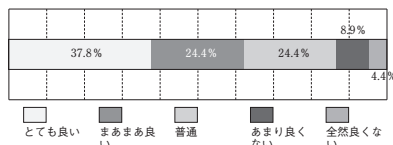
写真や映像（ビデオ）に関する評価は（図表 15）、「とても良い」が 37.8%、「まあまあ良い」が 24.4%、「普通」も 24.4%となっている。ただし、先にも触れたように、児童の評価は上方へぶれている可能性が否定できない。「あまり良くない」および「全然良くない」が合計で 13.3%を占めていることから、写真や映像に関する評価は他に比べて高いとはいえない。

映像機器の扱い方や部屋の照明など付帯的な事柄も含めて、写真や映像の見せ方にはさらなる工夫が必要と思われる。とくに児童の情報収集手段は「テレビ」が中心となっているだけに、テレビ番組の巧みな演出に対抗するような仕掛けが求められるといえよう。

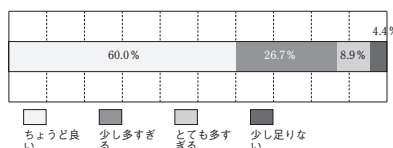
写真や映像の分量に関しては（図表 16）、「ちょうど良い」が 60.0%、「少し多すぎる」が 26.7%、「とても多すぎる」が 8.9%の回答率であった。実はこの設問の回答は事前の予測と異なっていた。2008 年度調査でも述べたことだが、講師側としては写真や映像の分量が十分ではなかったのではないかという思いが強かったので、児童からの「少し足りない」という回答が多数を占めることも想定していた。ところが、「ちょうど良い」が 6 割を超える回答となったことから、やはり 2008 年度調査と同様に以下のことを考えている。

まず、前述のように、写真や映像の中身に関しては評価が決して高いとはいえないと考えている。これはあくまでも（分量ではなく）写真や映像の質といった中身に児童の十分な興味を集められていないと感じるからである。穿った見方か

図表 15 写真や映像（ビデオ）への評価



図表 16 写真や映像の分量



もしれないが、テレビなどのCGグラフィックスを見慣れたものにとっては、写真と映像の総量よりも個々の刺激度が高い方が望ましいと感じられるのかもしれない。

こうしたことは、先に述べた“テレビ番組の巧みな演出に対抗するような仕掛け”が求められる所以だが、大学講師が用意する（動きのない）写真やごく平凡な映像でもってテレビに戦いを挑むには、対象物への深い掘り下げが必要とされよう。すなわち、写真一枚毎、映像毎の詳しく興味深い解説を行い、児童の耳目を集めるよう心掛けねばならない。つつい講師は手持ちの写真や映像を全て見せたい誘惑に駆られるが、児童へ見せるものは厳選し、かつ、そのそれぞれに対してじっくりと話しこんでいくことが肝要であろう。

(3) 調理実習およびその時間

調理実習に対しては（図表17）、全体の84.4%が「とても良い」、同じく6.7%が「まあまあ良い」と回答している。両者の合計は9割超に達している。

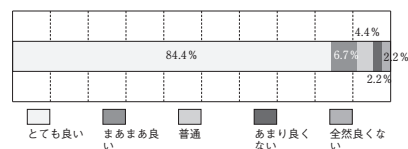
一方で、「普通」が4.4%、「あまり良くない」が2.2%、「全然良くない」も2.2%存在している。

調理実習の時間に関しては（図表18）、全体の80.0%が「ちょうど良い」としているが、13.3%が「少し長すぎる」との回答をしている。

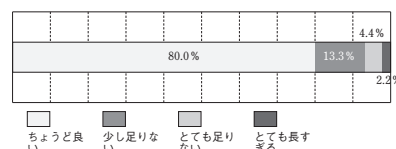
確かに調理実習は大勢の児童に指示を与えながらの作業であり、予定の時間を超過しがちであった。また、調理後の試食、そして食器洗いなどの後片付けもあって全体の時間は想定以上に長くなっていた。この点は2008年度以降に改善すべきこととして取り組んできたが、講師陣が毎回異なることもありなかなか改まらない。

さらに、アンケートの終りに児童が自由記述欄に要望などを記しており、そこには「遊びや体験の時間を増やしてほしい」といったものがある。地域開発モデル研究会では講師陣が今後十分に時間の配分と管理に配慮すべきと考え、その工夫を検討している。

図表17 調理実習への評価



図表18 調理実習の時間



(4) 大学生が小学校へやって来ることについて

大学生が小学校へやって来て「アジアシリーズ」に参加することについて訊いたところ（図表19）、「とても良い」が48.9%、「まあまあ良い」が15.6%で、両者の合計は64.5%の回答率となっている。「普通（＝可もなく不可もなく）」といっ

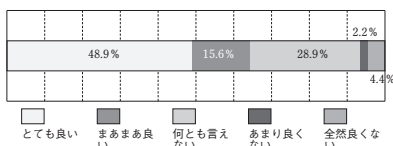
た回答も 15.2%に達している。

こちらの回答者は（大学生の来学を）決して否定しているわけではないが、さりとて「大学生が小学校へやって来ること」を肯定的に認めているわけでもない様子がうかがえる。児童自身が評価することに戸惑いを感じているのかもしれない。

また、この設問については児童が（大学生の感情に気をまわして）回答の中身を上方へ修正した可能性は否定できない。ある程度、これらの回答には上方へのバイアスがかかっていることを認識すべきであろう。

そこで、地域開発モデル研究会内部で、留学生や（助手役の）日本人大学生が何すべきなのか、児童とどう接すべきなのかについても検討したい。現在は、参加する日本人学生もあくまでも「先生」の一人として参加しているので、やや堅苦しい感じを児童に与えているのかもしれない。もう少し柔軟に「お姉さん」「お兄さん」といった立場で児童と接することも試行する価値はあるだろうと考えている。

図表19 大学生が小学校へやって来ること



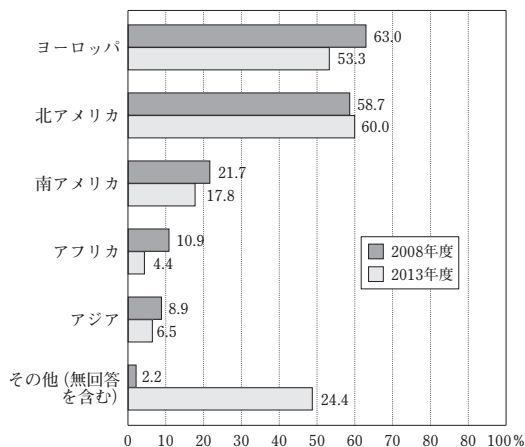
6 — 児童からの要望・希望

(1) 今後、話を聞いてみたい地域と国

アジアに限らず、今後、話を聞いてみたい地域と国を尋ねたところ（図表20）、多くの児童がヨーロッパと北アメリカ（ハワイを含む）を選択している（1人2個までの複数回答）。それぞれの回答率をみると、ヨーロッパが53.3%、北アメリカが60.0%、南アメリカが17.8%、アジアが6.5%、その他が24.4%となっている¹⁴⁾。

この設問に対する回答内でクロス集計を行うと、ヨーロ

図表20 今後、話を聞いてみたい地域（複数回答・回答率）



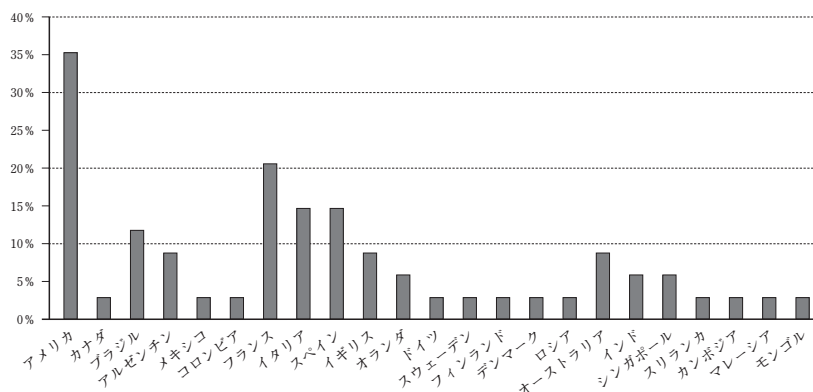
14) 「アジアシリーズ」が終了した時点でアンケートを実施しているため、児童の中に（次回の出席授業では）他の地域の話聞きたいという誘引が働いたことが考えられる。

ッパに関心のある児童のうち約半数は北アメリカにも関心がある（話を聞いてみたい）ことがわかる。

具体的な国名で見ると（図表 21）、ヨーロッパではフランスとイタリア、スペインに人気がある。この 3 カ国に続くのがイギリスとオランダだが、回答率で上位 3 カ国との間には開きがある。北米では、アメリカ合衆国が 35.3% の回答率で単独トップとなっている。南米に目を向けるとブラジル、アルゼンチン、メキシコ、コロンビアの名前が挙がっている。また、アジアでは回答率は低いながらもインドとシンガポールが同率 1 位になっている。

児童の関心は様々な国へ広がりを見せているが、欧米諸国に関しては、サッカーワールドカップの常連国が名を連ねている。この傾向は 2008 年度調査でも同様であった。スポーツの国際大会やその他の国際的な催しへの出場でテレビへの露出度が高いこと、かつ、そこに生身のヒーローと感じられる運動選手が紹介されることから、児童の関心を引いている側面もあるだろう。

図表 21 今後、話を聞いてみたい国（2013 年度）（複数回答・回答率）



(2) 今後、話を聞いてみたい事柄

国際理解教育に関連して「今後、話を聞いてみたい事柄」を尋ねた質問では、児童の回答は実に様々であった（自由記述・複数回答可）¹⁵⁾。ここでは細かい差異に目をつぶり、児童の回答を大別してみた。結果は図表 22 のとおりである。

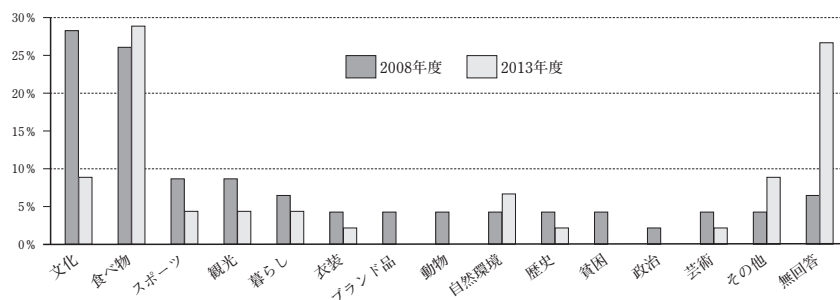
回答内容は、「アジアシリーズ」の趣旨に沿った回答を児童がしたのか、「文化」と「食べ物」の関心が高く、以下、大きく差を付けられる形で「サッカーを中心としたスポーツ」、「観光名所・世界遺産」、「暮らし」などつながっている。

一方で、2008 年度調査と 2013 年度調査で複数項目の回答率に大きな違いが出

15) この設問に対する回答総数は 28 個であった。2008 年度調査に比べて、回答数が半分になっている。

ている。これは、紹介した国の違いやそこで取り上げた話題の差異に基づくものと考えている。また、調査対象学年の違いも影響を与えているだろう。さらに、2008年度には6年生が保護者向けの発表会で「アジアシリーズ」で学んだことを研究発表したので、そのための「調べ学習」が児童へ様々なことに高い関心を抱かせたのではないかと推測している。

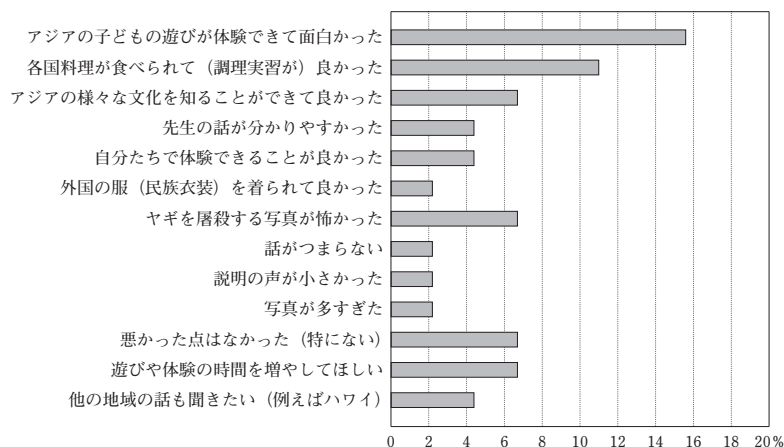
図表22 今後、話を聞いてみたい事柄（複数回答・回答率）



(3) 「アジアシリーズ」の良い点と悪い点の自由記述

アンケートの最後では、「アジアシリーズ」の良いと思う点と悪いと思う点（改善してもらいたいこと）を児童に自由に書いてもらった。ここでも回答は多岐にわたっているが、大きく14項目に大別をしてグラフ化した¹⁶⁾。その結果が図表23

図表23 「アジアシリーズ」の長短所（2013年度）（自由記述・回答率）



16) 回答総数は34であった。無回答は11であった。

に示されている。

良い点として挙げられたのは、回答率の高い順番に「アジアの子どもの遊びが体験できておもしろかった」(15.6%)、「各国料理が食べられて(調理実習が)良かった」(11.1%)、「アジアの様々な文化を知ることができて良かった」(6.7%)、「先生の話が分かりやすかった」(4.4%)、「自分たちで体験できることが良かった」(4.4%)、「各国の服(民族衣装)を着られて良かった」(2.2%)となっている。

逆に悪い点として挙げられたのは、「ヤギを屠殺する写真が怖かった」(6.7%)、「話がつまらない」(2.2%)、「説明の声が小さかった」(2.2%)、「写真が多すぎた」(2.2%)となっている。また、「悪かった点はなかった(特にない)」という回答も6.7%あった。

さらに、要望として「遊びや体験の時間を増やしてほしい」(6.7%)や「他の地域の話も聞きたい」(4.4%)といった意見もあった。

なお、今回調査では2008年度調査に比べて、自由記述欄への書き込みが少なかった。これは「アジアシリーズ」の実施期間の違いが影響しているのではないかと考えている。すなわち、2008年度が半年であったのに対して、2013年度は1年間となっている。半年ぐらいに集中的に授業を行う方が児童の記憶に残りやすいと推測できる。このことは、特定の目的を持って行われる特別授業などは、ある程度期限を限った短期集中的なものの方が高い教育効果を上げ得ることを示唆しているといえよう。

——おわりに——まとめにかえて

岡上小学校と和光大学の住所は、神奈川県川崎市と東京都町田市に分かれている。ただし、双方の学校はほぼ一本の道でつながっており、その距離も徒歩で15分ほどである。こうした近距離ながら異なる自治体に所在する教育課程も異なった学校同士が協同して児童向け国際理解教育プログラムを実施したことは、プログラムに携わった関係者および地域開発モデル研究会メンバーに多くの示唆を与えてくれた。

まず、学校が所在する(属する)地方自治体が異なっても協力が可能であることを再認識させられた。このことは、一般に広域な活動を行う大学が一方の当事者であることが受け入れられやすい素地につながると考えられる。仮に異なる自治体に属する小学校同士が共同で授業を実施する場合には、責任の所在、予算の分担といった事柄で入念な事前協議が必要となるだろう。この点、海外を含めて広域な活動の多い大学であれば、異なる立場を持つ組織との協働の経験に関しても蓄積があるため、リスク管理や予算処理などの課題にも対処しやすいだろう。

ついで、2008年度調査の時点でも述べたが、児童向けの国際理解教育の実施

であっても、その教育効果は双方向的なものであったことを指摘しておきたい。つまり、和光大学が一方向的に児童向けの授業を提供しているといった見方は表層的である。双方にとってメリットは大きかった。

研究会メンバーが指摘するのは、大学生が小学校での授業に参加して児童と接する機会を持ち、そのことで大いに刺激を受けた点である。大学生が（小学生児童に対して）指導的な立場に立つことで、自らを律する訓練を積んだことは間違いない。とりもなおさず教職課程の学生にとっては生きた学習の時間となっている。また、留学生らにとっては日本の小学校の日常を知る、貴重な機会となっている。授業後に児童らと身近な話題で話をするなど生きた国際理解の機会が生まれている。草の根の国際交流ともいえよう。

そして、これまで複数年にわたり授業を保護者の方へも開放してきたので、授業参観に訪れている児童の保護者にとっても生涯学習の場になっていたと考えている。実際に保護者からアジア料理のレシピを欲しいなどの要望も寄せられている。さらに、「アジアシリーズ」を受講した児童が保護者へその話題を語っているといったアンケート調査の結果もある。親子の絆を深めることへも寄与しているといえるだろう。

ここまで述べてきたように、いま、大学は「地域の知の拠点」として地元地域からの多様な要望に応えつつ、教育機関としての質的水準を上げることが期待されている。大学の持つ知的財産を地域に対して開放していくことが求められているのである。文部科学省が提唱する「大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム」では、「各大学における教育研究資源を有効活用することにより、当該地域の知の拠点として、教育研究水準のさらなる高度化、教育活動の質保証、個性・特色の明確化に伴う機能別分化と相互補完、（中略）地域と一体となった人材育成の推進を図ることを目的」としている¹⁷⁾。

それは、大学を地域の知財センターとして捉え直すことにつながっている。具体的には、大学の持つ人材を地域交流や国際交流に活用する、留学生らが地域行事やボランティア活動へ参加する、大学の各部局が講演会やコンサートなどの市民開放型の文化的催事を実施する、生涯学習の機会を提供する、通常講義を市民にも開放する、大学院で社会人教育をすすめるなど様々な形があり得る。

本稿で紹介した、地域にある教育課程の異なる学校への出前授業なども有望なものの一つであろう。すなわち、大学に求められる役割が研究と教育の領域から広がりをみせつつある時代に、多様な効果を持つ地元小学校と連携した児童向け教育プログラムは、今後の大学が果たすべき（地域）社会貢献に関する1つのロールモデルとなり得るかもしれない。「アジアシリーズ」のように大学の持つ知財を地域の学校へ“貸し出し”することは、貸し出し側にとっても教育や研究を

17) 文部科学省 HP http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/kaikaku/senryaku2.htm参照。

進化させ得る可能性を持っている。それは、参加学生の学びの場になると同時に、大学所属の研究者およびその協同研究員らが自らのフィールド（研究対象・研究対象地域）を地域の学校で紹介することは、研究成果の社会還元策ともなり得るからである。

地域開発モデル研究会としては、今後も率先して地域の学校と国際理解教育活動を連携して行い、成果の蓄積を重ねて、そのあるべき姿を探っていきたい。とくに、これからは地域貢献をさらに活性化させるための（学内）制度の充実についても考えていきたい。

[かとう いわお／BAMBANG Rudyanto／ふるおか ふみたか／Grace PHANG ING]